

イネの病害虫対策を徹底しましょう!!

資料提供・お問い合わせ
飛騨農林事務所農業普及課
Tel (0577) 33-1111
下呂農林事務所農業普及課
Tel (0576) 52-3111

気象庁の発表した3ヶ月予報(平成28年5月25日発表)では、7月は「前線や南からの暖かく湿った気流の影響で、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。」、8月は「平年と同様に晴れの日が多いでしょう。」となっています。イネは、曇りや雨の日が多いといもち病が、晴れの日が多いと斑点米カメムシ類や紋枯病が発生しやすくなります。

イネの病気や害虫について、その特徴を理解して早めに対策をとり、被害を未然に防ぎましょう。

● いもち病

イネにとって大きな減収の原因となる「いもち病」は恐ろしい病気であり、飛騨地域で栽培されている「コシヒカリ」や「ひとめぼれ」は、いもち病に対する抵抗性が弱いいため注意が必要です。

いもち病は、最低気温が16℃以上で湿度が高い状態が続くと発生しやすくなります。飛騨地域では6月下旬頃から「葉いもち」が発生するようになります。「葉いもち」で形成されたいもち病の胞子は、「穂いもち」の伝染源となり、出穂期に穂首などに感染し、モミに実がまったく入らない白穂を発生させ、減収の原因となります。



葉いもち(写真左)と穂いもちによる白穂(穂首いもち)

○ いもち病対策のポイント

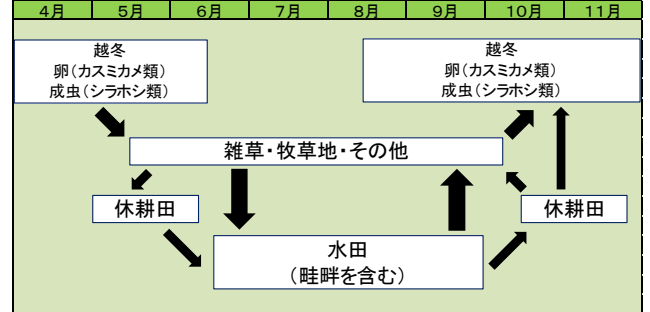
- ・ 補植用の苗は、いもち病の発生源となりますから、早めに廃棄してください。
- ・ 移植時に使用する箱施用剤は、いもち病に最も効果が高い予防剤です。箱施用剤を使用していない場合は、初発の時期となる6月中・下旬に予防剤を散布し、「葉いもち」の発生を抑えましょう。なお、箱施用剤を使用した場合でも、出穂10～20日前に再度予防剤を使用すると「穂いもち」の予防に効果的です。
- ・ 出穂の時期は「穂いもち」が感染する時期で、防除には重要な時期になります。予防剤を使用していない場合や「葉いもち」が発生しているところでは、穂の出始めから穂が出そろう頃が最も感染しやすいため、この時期に防除を確実にこなしましょう。

● 斑点米カメムシ類

飛騨地域における主な斑点米カメムシ類の種類、生態は下図のとおりです。斑点米カメムシ類は、卵または成虫で越冬し、5～6月には畦畔などのイネ科雑草に寄生し繁殖します。7月以降は、エサとなる植物を求めて出穂直後のイネへ移動し、加害します。秋には再び水田から周辺の雑草地に移動し、産卵・越冬します。斑点米カメムシ類にとって、イネは一時的なエサに過ぎず、ほとんどはイネ科雑草や牧草で生活しています。



飛騨地域の主な斑点米カメムシ類



斑点米カメムシ類の生息場所と飛来経路

○ 斑点米カメムシ類対策のポイント

- ・生息場所やエサ場となっている畦畔などは、雑草が繁茂しないように管理し、特にイネ科の雑草は、穂が出る前に刈り取りましょう。
- ・イネの出穂10日前までに地域一斉で畦畔などの草刈りをおこない、斑点米カメムシ類を水田に近づけないようにしましょう。
- ・ヒユ、ホタルイなどの水田内の雑草は、斑点米カメムシ類のエサになるので除草を徹底しましょう。
- ・斑点米カメムシ類の防除は地域一斉に効果の高い薬剤を出穂後に2回、散布をおこなうと効果が高くなります。

● 紋枯病

紋枯病は、高温多湿条件となる7～8月に発生し、近年、飛騨地域でも発生が増加しています。紋枯病は、前年、水田に落下した紋枯病の菌核（菌糸のかたまり）が水に浮いてイネの茎に接することで感染します。病斑は小判形の淡褐色で、葉鞘（葉の部分がさや状になり茎を包む部分）を下から上へ次第に上がっていき、多発すると倒伏の原因となります。また、止め葉まで発病するとモミに実が入らなくなり、大幅な減収となります。



葉鞘と葉に発生した紋枯病（甚発生）

○ 紋枯病対策のポイント

- ・上位葉まで進行すると収量に大きく影響するため、出穂10～20日前に防除を実施すると効果的です。
- ・出穂期以降、高温多雨で経過し、上位葉へ進行が認められる場合は、追加防除をおこないましょう。
- ・昨年発生したほ場では、防除をおこないましょう。

病害虫防除の薬剤については、稲作情報誌「飛騨のこめ」やJAひだ「営農の手引き」を参照してください。

農薬を散布する時は、住宅や他の作物、家畜、養蜂に配慮して危害防止に努めましょう。